令和四年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜　全日制の課程（追検査）

Ⅱ　国　語

注意事項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　問題は **問五** までであり、1ページから14ページに印刷されています。

3　解答用紙の決められた欄に解答しなさい。

4　数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。

5　マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の ◯ の中を塗りつぶしなさい。

6　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

7　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号
番

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次のa～dの各文中の――線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　運動を奨励する。　（1　しょうかん　2　しょうりき　3　しょうれい　4　かんれい）

b　演奏を披露する。　（1　ひろう　2　とろう　3　とろ　4　はつろ）

c　滑稽な話を聞く。　（1　こっかく　2　こっけい　3　かっこん　4　かっさい）

d　幼い頃を顧みる。　（1　こころ　2　し　3　かえり　4　かんが）

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　生地がシンシュクする服を着る。

1　試合のシュシンをつとめる。　2　山頂までもう一息のシンボウだ。

3　意向をダシンする。　4　ひざをクッシンする。

b　問題のカクシンにせまる。

1　歴史あるブッカクをたずねる。　2　組織のチュウカクをになう。

3　育てた野菜をシュウカクする。　4　新人選手をカクトクする。

c　仕事をユダンすることなくやりとげる。

1　食料品を貨物船でユソウする。　2　休み時間をユカイに過ごす。

3　すり傷がチユする。　4　地中からゲンユを採掘する。

d　風にサカらって走る。

1　劣勢からギャクテンする。　2　次の舞台のキャクホンを担当する。

3　従来のやり方からダッキャクする。　4　ザンギャクな行為を許さない。

(ウ)　次の短歌を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

春の岬　旅のをはり(オ)(ウ)の鷗(かもめ)どり浮(う)きつつ遠(とお)くなりにけるかも　　三好(みよし)　達治(たつじ)

1　波しぶきをあげて荒れる海に、旅を終えた鷗たちがなすすべもなく漂う光景を「春の岬」という語句で印象づけることによって、作者の心に残る旅の一場面を克明に描いている。

2　旅の目的地である春の岬に向かって飛んでくる鷗たちに自身の心を投影し、旅を終えた解放感に浸る作者の心情を、「旅のをはり」という語句を用いることで効果的に描いている。

3　春の岬を自由に飛び回っている鷗たちの姿に心を打たれ、自身も心赴くままに生きようと決意したときの作者の心境を、「浮きつつ」という語句を示すことで印象的に描いている。

4　旅を終えて羽を休めている鷗たちに自身の心を重ね合わせ、「遠くなりにけるかも」という語句を用いることによって、春の岬において作者が抱いた感慨を情緒的に描いている。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸の菓子職人「治兵衛」は、娘の「お永」と孫娘の「お君」とともに、麹町で「南星屋」を営んでいる。手首を痛めた「治兵衛」は、店を手伝ってもらうために、諸国を渡り歩く菓子職人の「雲平」を雇った。ある日、弟の「石海（五郎）」が菓子を買いに店を訪れたところで、「治兵衛」は「雲平」を雇ったことを伝えた。

暑苦しいばかりだった軒の蟬が、一瞬だけ鳴くのをやめた。

しばし黙り込み、おそるおそる伺いを立てるようにして、またじいわじいわとやり出したが、心なしか勢いが失せていて、いかにも申し訳なさそうだ。それほどに、弟の声は大きかった。

「わしは決して承知せんぞ！　駄目だと言ったら駄目だ！」

坊主頭の下の丸い目が睨みつけるさまは、達磨にそっくりだ。顎だけが四角張っていて、猛牛のごとく、しゅうしゅうと鼻息ばかりが荒い。小さな子供なら、たちまち泣き出してしまいそうな形相だが、おそらくこんな顔をされるだろうと、治兵衛には予測がついていた。

「だがなあ、五郎。この手が治るまでは、誰かに助けてもらわねえと。どのみち、職人を雇うつもりでいたんだ。」

と、白布を巻かれた左手を見せる。利き手ではないにせよ、菓子職人にとっては致命傷だ。こねたり練ったりといった力仕事ができなくなり、右手一本では、頭に描いた図とは、似ても似つかない不細工な菓子にしかならない。

娘と孫と三人きりの小さな店だが、このまま幾月もまともな品が作れないようでは、たちまち暮らしは干上がってしまう。短いあいだだけでも職人を雇って凌ぐより他はないかと考えはじめていたとき、まるで計ったように雲平が現れた。

腕も人柄も申し分ない。雲平も承知してくれて、これでようやく一難が去ったと思ったら、違う一難がやってきた。

弟の石海は、是現寺という牛込にある小さな寺で住職をしている。兄の拵える菓子をことさら楽しみにしていて、以前は月に二、三度だったのが、いまは五日とあけず、必ず南星屋に顔を見せる。

今日あたり、そろそろ来るだろうとの見当は見事に当たり、雲平に外出を促したのは良策だったと内心で息をついた。雲平は、若いころに修業していた神田の菓子店に挨拶に行っていた。

「人を雇うなら、身許のたしかな者がいくらでもいるだろう！　よりにもよって上方から下ってきたばかりの、どこの馬の骨ともわからぬ男を家に入れるなど言語道断。もしかすると、盗人の手先かもしれぬのだぞ！」

「いやあね、五郎おじさんたら。こんな小っさい菓子屋なぞ、盗人が狙う道理がないわよ。」

孫娘のお君が、ころころと笑う。昔の癖で、治兵衛は弟を僧名ではなく俗名で呼ぶ。ためにこの家では、娘や孫にも五郎おじさんと呼ばれていた。

「狙いはこの家ではなく、件の旗本屋敷かもしれぬではないか。隠居が高名な茶人というなら実入りもそれなりにあろうし、逃げた菓子職人とやらが手引きをしていたのかもしれぬ。」

雲平が実の弟のように思っていた職人仲間が、奉公していた旗本屋敷から消えた。しかも茶人であった隠居が見罷ったその日から姿が見えない。大いに怪しいとされ、屋敷の内では毒殺説までもち上がってい

たが、弟の発想はさらに突飛だ。
思わず治兵衛とお君が笑い出し、日頃は控えめな娘のお永さえ、弛んだ口許を袂で覆う。
「そいつはねえよ、五郎。」
「どうして、そう言い切れる。お人好しの兄上に見通せるのは、せいぜい表の面の皮一枚きりだぞ。」
憤然と言い放ち、砂糖と寒梅粉でできた吹き寄せ(注)を、三つまとめて口に放り込む。きこえよがしに、ばりばりと音を立てて噛み砕いた。
「あいつの腕を見れば明らかだ。あれほどの技をもつ男が、わざわざ盗人に落ちる謂れなぞ、どこにもねえよ。」
「おじいちゃんに言わせれば、真っ正直で、間違いのない職人業だもの。」
「作る菓子には、どうしても人柄が出るそうですからね。」
お君に続き、お永までもが肩をもつ。石海の顔が、ますます忌々しげに苦りきり、[2]まるで仇のように、五種の型に抜いた砂糖菓子を睨みつけた。
弟の頑なを解きほぐすように、治兵衛は努めて穏やかに語った。
「なあ、五郎、きいてくれ。この麹町に菓子屋を開いて、今年でちょうど二十五年目になる。幸い店は繁盛して、一家三人つつがなく暮らしてきた。何の障りも滞りもないと、そう考えてきたが、ひとつだけ不足があった。」
何だ？　と問うように、いかつい片眉が怪訝そうに上がる。
「菓子職人としての、おれのありよう、とでも言えばいいか……うまく説けねえんだが、言ってみりゃ、この二十五年のあいだ、おれは職人としては閉じていた。」
職人の根っこともいえる、本分に近いところを否定したに等しい。誰もが少なからず驚いたようで、弟だけでなく娘や孫もにわかに目を見張る。
決して比喩ではなしに、閉じていたのは治兵衛の目蓋だった。
修業時代も、また旅をしていたころも、治兵衛のまわりは発見に満ちていた。
新しい菓子、新しい手業。土地や水が変われば、同じ名をもつ菓子ですら、まったく違う姿をとる。そのひとつひとつが、どんな貴石よりも輝いて見えた。
しかし江戸に留まってからは、そんな眩しい瞬間から遠ざかってしまった。もちろん、江戸にはどこよりも多くの品が集まるから、他所の店の菓子から学ぶことは多い。これはどこそこで見た地方の菓子に似ているなとか、これはあそこの菓子の工夫を加えた方がもっと美味しくなるなとか、折々に刺激にはなるのだが、実際に技を盗み、味をたしかめていたあのころの鮮烈さとは、とうていくらべものにならない。
そういう暮らしが続く中、[3]己でも知らぬ間に、目蓋が落ちていた。
外が見えなくとも、自分の中にある技と知恵でやりくりできる。なまじ客の評判がよく繁盛していただけに、これでいいと、いつのまにか慢心していた。
そんな治兵衛の目を、雲平はかっきりと開かせてくれた。
雲平が渡り職人をしていた時期は、治兵衛が江戸に落ち着いていたころに重なる。職人は、師匠から受け継いだ手法を踏襲し、伝統を守っていくが、決してそれだけではない。あれこれと悩み、自身で思案し工夫して、後の世に伝える役目も負う。外からは目に見えぬほどゆっくりとながら、技も材も進化している。いまさらながらに、治兵衛はそれを思い知った。
雲平の手の動きは、二十五年間止まっていた治兵衛の時を、揺り動かしてくれたのだ。

そのやり方には、随所に治兵衛の知らない新しい技が垣間見える。まだ二、三日のことであるし、親方を慮ってできるだけ治兵衛に合わせてはいるものの、もっとさまざまな目新しい技をもっているはずだ。それが見たいと、心の底からの素直な欲求がわいていた。

「こんな爺になっても、我ながら業が深えと呆れるが、おれはあいつの技を盗みてえ。おれの知らない工夫や手際、最近できたばかりの菓子なぞを、あいつを通して身の内に仕込んでみてえ。[4]その欲がむくむくわいてきて、てめえでも抑えきれねんだ。」

いつになく饒舌な兄の顔に、じっと目を注ぐ。少しの間の後に、大きなため息が返った。

「手が使えぬようになってから、ずいぶんとがっくりきていたのに、今日来てみれば見違えるように勢いが戻っている。いったいどんな幸甚が降ってきたかと思えば、そういうことか。」

顔にはあまり出さないが、よほど心配していたのだろう。吐いた息には、あきらめより安堵が多く混じっていた。

実際、この歳でからだを痛めると、自分が思う以上に気持ちが弱くなるものだ。ただでさえ短い先行きがいきなりすぼまって、もう駄目かもしれないと暗澹(注)とする。口にはしなかったものの、ここが引き際だろうかと、隠居のふた文字が何度もちらついた。日をおいた餅のごとく、かちかちに硬く縮こまった気持ちが、雲平という炭火を得て一気にふくらんだ。兄を気遣う弟には、そのようすが当人よりもはっきりと察せられたのかもしれない。

「すまねえな、五郎。おめえにも、たんと心配をかけちまった。」

「いまとなってはふたりきりの兄弟だからな。水くさい遠慮は無用だが……[5]兄上がそこまで言うなら仕方ない、しばし静観してやるわ。」

（西條　奈加「亥子ころころ」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）神田＝現在の東京都にある地名。
上方＝現在の京都府や大阪府を中心としたあたりの呼称。
旗本屋敷＝江戸時代、将軍直属の家臣である武士が住んだ家。
隠居＝役職から退いた人。またはその行為。
見罷った＝死去した。
吹き寄せ＝さまざまな色や形をした砂糖菓子を盛り合わせたもの。
暗澹＝暗い気持ちでいるさま。

(ア) ――線1「ようやく一難が去ったと思ったら、違う一難がやってきた。」とあるが、そうしたときの「治兵衛」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 将来が有望な菓子職人である「雲平」の働きで、店の苦境を乗り越えられたことに喜びを感じていたが、「雲平」を雇い続けることに「石海」が否定的であることがわかったため、思い悩んでいる。

2 けがで菓子を作れなくなり困っていたところ、「雲平」が自分の代わりとして店を営業し続けてくれたが、「石海」がどんな状況でも他人に頼るべきではないと怒り出したため、落ち込んでいる。

3 けがで思うように菓子を作れず困っていたときに腕のいい「雲平」が店に加わり、生活の見通しも立つと安心していたが、「雲平」を雇うことに「石海」が納得してくれず、気が休まらずにいる。

4 けがをしたために菓子を作れる人がいなくなったことによる店の苦境を、諸国を旅する菓子職人の「雲平」の助けで乗り越えられたはずだったが、「雲平」が盗人であるとわかり、動揺している。

(イ) ――線2「まるで仇のように、五種の型に抜いた砂糖菓子を睨みつけた。」とあるが、そうしたときの「石海」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 素性がわからない者を雇うことへの危うさを伝えているにもかかわらず、「治兵衛」が聞き入れてくれないだけでなく、皆も「雲平」を信じて疑わないことに、腹立たしさを覚えている。

2 「治兵衛」がけがをしている以上は、唯一の身内である自分が本来店を手伝うのが道理であるはずだが、皆が他人である「雲平」に店をまかせようとしていることに、不満を抱いている。

3 「雲平」が疑わしい人物であるという情報を信じていたが、「治兵衛」の話を聞くにつれてまったくの誤解であったとわかり、真偽が不明な情報をつかまされたことに、怒りを覚えている。

4 人の本性を見抜くことは、寺の住職として多くの人と関わる自分のほうが「治兵衛」よりもすぐれているはずだが、皆が「治兵衛」の見解を支持していることに、恨めしさを抱いている。

(ウ) ――線3「己でも知らぬ間に、目蓋が落ちていた。」とあるが、そのときの「治兵衛」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自分がいなくても商売がうまくいっていたため菓子作りの現場から離れて過ごすうちに、菓子作りに面白さを感じられなくなったばかりか、商売への意欲も失われてしまっていた。

2 自分の技量だけでやり過ごすことに慣れてしまっただけでなく、店も繁盛していたために思い上がってしまい、自らの力を高めようと外の世界に新しい刺激を求めなくなっていた。

3 多忙な毎日に振り回されて過ごすうちに、修業していたころに感じていた菓子作りの楽しさを忘れてしまっていたことに加え、他の職人たちと技を競い合おうとしなくなっていた。

4 菓子に流行を取り入れることが求められる江戸での商売に疲れてしまい、流行を気にせず自分が作りたいと思う菓子だけを作るうちに、菓子職人としての存在意義を見失っていた。

(エ) ――線4「その欲がむくむくわいてきて、てめえでも抑えきれねんだ。」とあるが、このときの「治兵衛」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 諸国を旅する中で菓子作りにおける独自の手法を完成させた「雲平」のように、自身も新たな技術を身につけ、世間から注目される菓子職人になりたいという欲求が湧き上がっている。

2 洗練された技を駆使する「雲平」の働きを見たことで、菓子職人としての自分を振り返り、若い職人と働くことを通して自ら考案した技に磨きをかけたいという決意を新たにしている。

3 新しい菓子作りの技を熟知している「雲平」を利用して、習得することが困難とされている技を自身も使いこなせるようになった上で、店の評判を高めていこうと野心を抱いている。

4 多彩な技を使いこなす「雲平」と一緒に働いたことで、菓子職人に対して思い描いていた理想の姿を思い出し、新しい技術を知るとともに技量も高めたいという衝動に駆られている。

(オ) ――線5「兄上がそこまで言うなら仕方ない、しばし静観してやるわ。」とあるが、ここでの「石海」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 けがをして落ち込んでいた「治兵衛」を心配していたが、偶然居合わせた「雲平」が元気づけてくれたとわかり、感謝をしつつも行動できなかった自分のふがいなさをかみしめるように読む。

2 「雲平」を信用できるかどうかはわからないが、職人としての情熱を取り戻した「治兵衛」の見違えたようすに安心し、固い意志を受け止めて今のところは見守ろうという思いを込めて読む。

3 家族に心配をかけたくないという「治兵衛」の思いは理解しつつも、信用ならない「雲平」を雇うことには納得できないため、裏切られても自分には関係ないということを強く示すように読む。

4 忠告をまったく聞き入れない「治兵衛」の態度に呆れたものの、家族として見捨てるわけにはいかず、「雲平」に対して心配していることが現実に起こらないでほしいという願いを込めて読む。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「雲平」との出会いを転機として、菓子職人としての生き方を振り返り、再出発を決意した「治兵衛」の思いを「石海」が受け止めていくさまを、効果的な心情表現によって生き生きと描いている。

2 菓子職人からの引退を転機として、「治兵衛」が自身の生き方を見つめ直し、自身の知り得る菓子作りの極意を「雲平」に伝授していくさまを、職人の専門的な用語を駆使して力強く描いている。

3 思うような菓子を作れなくなったことを転機として、「治兵衛」がやり方を見直し、「石海」を満足させるために努力を重ねていくさまを、江戸時代の言葉遣いを用いて臨場感豊かに描いている。

4 菓子の販売不振を転機として、「治兵衛」が新しい作り方を模索し、難局を乗り越えようと奮闘する姿が「雲平」や「石海」の心を揺り動かしていくさまを、会話を軸として印象的に描いている。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

道具は、使用されている限り、常に他の道具との連関の内にある。それは単独ではありえない。茶碗(ちゃわん)は箸とともにあるし、二つは食卓の上に置かれる。食卓は、食堂もしくは居間のなかに据えられ、部屋は建物の一部をなす。[1]器は、もしそれが単独で展示されたら、欠損状態にあることを自ら示すだろう。茶碗だけが置かれていたら、それは箸の不在を告げ、これを求めさせるにちがいない。いい方を換えれば、他の道具と切り離されて私たちの前に置かれたとき、道具は道具でなくなるのであり、「道具である」とは、この連関とともにあることにほかならない。そうだとすると道具は、私たちが通常見なしているように単体の対象としてあるのではなく、連関として、したがって広がりとしてあるということになろう。

連関としての道具は、対象のように輪郭づけられた物体に収まらず、他の道具と関係しつつ広がっているわけだが、この広がりに限界を定めることはできない。茶碗を茶碗たらしめている連関が食堂で終わるとか、あるいは食堂が属す建物で終わるとかいったことに、必然的な根拠はない。なるほどそれは、無限に続くとはいえない。私たちは、それを使用している限り、その広がりのなかに入り込んでいるのだから、「無限に続く」と規定できる視座に立っていないのだ。［　A　］自分たちが使用しながら存在している広がりの果てはわからず、規定できないという意味では無限定である。

連関を広がりと表現するのは、道具のつながりが、けっして単線的ではないからでもある。茶碗は箸につながるだけでなく、同じ食卓の上に置かれた他の食器とも同時につながりうる。連関は、複線的に広がっていると考えるべきだろう。またそうして広がるつながりは、変容の可能性を孕(はら)んでいる。茶碗は恒常的に箸と結びつくのではなく、スプーンやフォークとも結びつきうるのであり、さらにその関係は、いつでも変化しうる。

このつながりは、道具がなにかのための道具である限り、手段・目的の関係を主軸にしており、使用者たる私たちによって使用目的に向けて整えられるかたちで生成する。その意味では、つながりは使用者が意図した目的を孕んでいる。けれども[2]この関係は、個別使用者の意図だけに還元できるものではない。意識された意図という意味でなら、それはこのつながりのごく一部でしかあるまい。なるほどたいてい私たちは、当初なにかのためにと意識して使用を開始するが、すぐさま、またことに道具と一体になっているときは、意図など意識しはしない。そこで実際働いている使用の道筋は、使用に直接携わっている特定の個人が築き上げたものではなく、彼が成長の過程で教えられ身に着けてきたもの、したがって文化的歴史的に作られてきたものである。その歴史もまた無限定に広がっている。

広がりとしての道具の歴史性は、いま確認したような使用者個人のパースペクティヴ(注)から見られただけのものに尽きはしない。たとえば家屋、あるいはときとして家具がそうであるように、道具は個人の生命の長さを超えて使われていく。そこでは、人が家屋をわがものとして所有するのではなく、［　B　］家屋の歴史に個人が所属する。家屋のような「大きな」道具だけの話ではない。なるほど今日、ものへの関係は、個人に機軸を置いて考えられるのが常であり、個人の要求次第で、ものは不用品として処分されていくことも頻繁に起こっている。いわゆる「使い捨て」は家屋にとってすら無関係ではないかもしれない。けれども[3]「所有」と呼ばれるこの関係だけが、道具との関わりではない。少なくともかつて、日常の小さな器ですら、世代を超えて使い渡されていく世界があった。生まれては死んでいく人々の方が道具に所属するのであり、個人を超えてつながるこの空間を通り過ぎていく。道具はそういう意味でも歴史的な広がりなのだ。そのような広がりをなお体感的に生きている京都生まれ京都育ちの私の友人は、人が通り過ぎていく空間としての道具のことを「所有物」と呼ばず、「預かりもの」と呼ぶ。「預かりもの」としての道

具は、過去と未来への、個人からすると限定できない開けを携えている。

かくして道具という連関は、空間的時間的に無限定に広がっているが、II 別な方位において、限界づけられてもいる。使用は基本的に有用なものとの出会いだが、私たちはこのとき、有用性の限界、有用の連関の外部に同時に触れている。たとえばそれは、建物を包む庭園の向こうにある自然である。それが「風景」と呼ばれたとき、さらには「借景」というかたちで制度化されたとき、有用性の連関の内部に引きずり込まれていくが、こうした自然もまた、有用性の連関を縁どって、さらにその外部を示唆している。有用性に触れながら、その縁にあって、いわば有用化から逃れ去らんとしているものは、「外部の自然」だけではない。「内部の自然」、「道具のなかの自然」とでもいうべきものがある。[4] それはいわゆる「素材」のことだ。器を形づくる木材や土は、堅牢なものという意味で、有用性の連関のなかに組み込まれてはいる。けれども茶碗を成型している土は、使用の現場で、単に崩れないもの、あるいは水分を通さないものとして、あるだけではなく、それ以外のものとしても、そこに現われている。陶器の手触り、漆器の温みとして私たちの使用を構成するものもまた、有用性の連関を内的に縁取るものとして、この連関に限界を与えている。

連関を外的ならびに内的に縁取っている限界は、手段・目的の意味づけとは、別なかたちで与えられている。有用性の連関が意志と理解に基づいて構築されるのに対して、有用性の限界との接触は、いまも「陶器の手触り」という例を以って示したように、感性的な出来事であり、特に一体化とは、そのような事態を表わしている。この場合人間の感性的な能力のなかで視覚は、外的な限界としての風景への関わりの場合のように、排除できないとはいうものの、優位性をもたない。視覚は、基本的にものを他なる対象として向こうに立てるのであり、[5] そういう意味では、これに基づく経験は、むしろものとの一体化を拒みさえする。それに対して一体化をもたらすのは、この言葉自体が示すように、なによりもまず触覚だろう。道具は手にピタリとついてこそ、わがものとなる。映画監督として「見ること」に強くこだわった吉田喜重は、見ることが必要とする他性を際立たせる一方、ものと一体化する感覚として、よりプリミティヴな触覚を挙げているが、写真や映画から進めてきた議論の流れでいえば、ウァルター・ベンヤミン(注)も思い起こすべきだ。というのも、彼は「視覚的」経験に対して、「触覚的」経験を別なものとして、際立たせたからである。彼によれば、それは歴史的には以前からあったもの、建築空間の内部を歩きながら享受するような体感的経験のことである。ベンヤミンは、ラテン語由来の「触覚的」という言葉を用いて、古くて新しい経験を指したが、ここでの「触覚」は、「視覚」以外の多様な感覚を指し、以って「視覚」の単一的な支配を退けようとしたものと見なすべきだ。建築空間の内部を歩く経験には、当然聴覚や嗅覚も入ってくる。道具と一体になった使用経験として、「食べる」という経験を考えれば、当然味覚も加わる。要は、道具との一体化の経験は、多感性的なものなのだ。

（伊藤　徹『《時間》のかたち』から。一部表記を改めたところがある。）

（注）パースペクティヴ＝ここでは、物事に対する見方。
プリミティヴな＝そもそも備わっている感覚としての。
ウァルター・ベンヤミン＝ドイツの哲学者（一八九二～一九四〇）。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　ただし　　B　むしろ　　2　A　だから　　B　ところで
3　A　たとえば　　B　つまり　　4　A　けっして　　B　しかし

(イ) 本文中の〰〰線Ⅰの語の類義語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　瞬間的　　2　効率的　　3　例外的　　4　永続的

(ウ) 本文中の〰〰線Ⅱの「が」と同じ意味で用いられている「が」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　私は冷たい水が飲みたい。　　2　雨は降ってきたが風は穏やかだった。
3　我が家の自慢料理を紹介する。　　4　初心者だった私が今ではチームの中心選手だ。

(エ) ——線1「器は、もしそれが単独で展示されたら、欠損状態にあることを自ら示すだろう。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　器をはじめとした道具は、使用されることで初めて道具としての使い方が定まる性質があり、単独で置かれているだけでは、人は便利かどうかの判断ができず単なる置物と認識するから。
2　器をはじめとした道具は、時や場所を選ぶことなく多様な使い方ができる性質があるが、単独で置かれているときは、道具としての機能に優れていることを人に示すことができないから。
3　器をはじめとした道具は、他のものと結びつくことで初めて道具として存在することができるという性質があり、単独で置かれているときは、道具として存在しているとはいえないから。
4　器をはじめとした道具は、他のものと一緒に使用されることで使い勝手がよくなる性質があるが、単独で置かれているだけでは、道具を使い込む楽しみがないと人に見なされてしまうから。

(オ) ——線2「この関係は、個別使用者の意図だけに還元できるものではない。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　道具同士の多様な連関は人の使用目的に向けて作り上げられるが、使用者個人の意図だけではなく、文化的な背景に基づいた使用の道筋が反映されているということ。
2　道具同士の多様な連関は使用者個人の意図だけが重要なのではなく、多くの人々の使用目的を基に成立しており、道具の使い方が文化の中で縛られているということ。
3　道具同士の多様な連関は使用者個人の意図に左右されず、道具の使い方が文化の中では限定的であるからこそ、使用目的は伝統に基づいて制限されているということ。
4　道具同士の多様な連関は固定的ではなく、使用者個人の使用目的に応じて変えられるほか、文化的な価値基準に基づいた使用方法で決定づけられているということ。

(カ) ――線3「『所有』と呼ばれるこの関係だけが、道具との関わりではない。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人と道具の関わりにおいては、道具を次の世代に受け継いでいくことが一般的とされているが、使い古されてきた道具を生活の場で使用するのは実用的ではないとも考えられるということ。

2 人と道具の関わりにおいては、道具は個人に所属すると一般的には捉えられているが、道具は世代を超えて使用される場合もあることから一方的な関係ではないとも考えられるということ。

3 人と道具の関わりにおいては、道具を使う主体は人であるということが一般的な捉え方だが、道具によって人の生活が変わる場合があることから道具が主体であるとも考えられるということ。

4 人と道具の関わりにおいては、個人の考え方で道具の利用価値が決まると一般的に捉えられているが、世代を超えて使用される歴史性が道具の利用価値を左右するとも考えられるということ。

(キ) ――線4「それはいわゆる『素材』のことだ。」とあるが、筆者は「素材」についてどのように述べているか。これを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「素材」は、ものを道具として見せるために用いられるだけでなく、作り手の情熱や道具を使い続けてきた人たちの思いまでも表現できる性質を持っている。

2 「素材」は、新鮮なうちに処理や加工をしなければ使えるようにならないものだが、廃材利用や繰り返しの使用には不向きであるという性質を持っている。

3 「素材」は、思い通りに形を変えられることから道具の価値を高めるために用いられるだけでなく、見た目をよくするために使えるという性質を持っている。

4 「素材」は、人が自分たちにとって有用性があるものを自然から利用しているものだが、道具を形づくり人に道具であることを感じさせる性質を持っている。

(ク) ――線5「そういう意味では、これに基づく経験は、むしろものとの一体化を拒みさえする。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「視覚」は、対象との間隔がなければ機能しない感覚であるため、「視覚」を基にした経験においては、人がものの欠陥を見つけ出すときにものと離れる必要性が出てきてしまうということ。

2 「視覚」は、人に備わっている感覚の中でも個人の意識に左右されるものであるため、「視覚」を基にした経験においては、鑑賞するときに見たいと思った対象しか視野に入らないということ。

3 「視覚」は、対象を自分ではない他のものとして認識する感覚であるため、「視覚」を基にした経験においては、人がものと関わるときに対象との間に隔たりを生じさせてしまうということ。

4 「視覚」は、人に備わった感覚の中でも表面的に知覚することに特化したものであるため、「視覚」を基にした経験においては、ものの内部構造を理解するときに全く役に立たないということ。

(ケ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 道具が使い捨てられている現状を通して人と道具の関係を整理するとともに、道具の扱い方について、客観的な資料を補って説得力を持たせながら述べている。

2 様々な例を示して人と道具の関係を考察するとともに、人と道具が一体となるときの感覚的な経験について、道具を軸とした関係性を追究しながら述べている。

3 様々な人の体験を基に人と道具の関係を把握するとともに、道具が人間社会に及ぼした影響について、道具の機能の移り変わりを明らかにしながら述べている。

4 人を取り巻く環境の変化から人と道具の関係を考えるとともに、人が道具を所有する際の心構えについて、道具が経てきた歴史を振り返りながら述べている。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

備中（注）国英賀郡水田と言ふところに、代々国重と名乗る刀鍛冶あり。その代々の中に分けて誉れ高きは、大月与五郎国重なり。

この与五郎いまだ幼かりし頃、ある日父の八郎左衛門、与五郎に向かひ「汝よく聞けよ、いづれの道も同じこととは言ひながら、分けて我が家の[1]鍛冶の道は、親の伝へ、師の教へのみ守りては上手にはなりがたきものなり。さればこそ近頃世に名高き関（注）孫六は、その始め何とぞいまだ世の鍛冶の打ち出ださざる（注）焼刃を焼きて世に名を知らればやと常に工夫し居たりしに、ある時その妻衣を洗ひ干したる竿に村雨の降り来て、その雨だれの竿よりとくとく流れ落つるを見てこれこそはと思ひ、すなはちそれに似せて焼きたりしが殊にめづらしき焼きゆゑ、これより孫六が三本杉の焼きとて世には称せられぬ。」と語りければ、[2]与五郎せせら笑ひ、「さればこそ世の人孫六を上手なりと称すれども、その打ちし刀を見るにさらにとるすぐれたところもなき（すぐれたところもない）作と思ひしが、果たして今の御物語（年が若く経験も浅いというのに）を承るに、その目のつけどころが悪しきゆゑなりし。」と言ふ。父叱りて、「汝いまだ口のはたの黄なるに、上手の父をそしることやある。」と言ふに、与五郎答へけるは、「すべて物を似せるに何ごともその手本ほどにはできぬものなり。されば、その手本こそは肝要なれ。我このほど夜な夜な空を見るに、およそ銀河ほどさえたるものはなし。よて我は銀河に似せて焼かんと思ふ。」と言ひければ、父、大に感じて「[3]我が家をおこすべきものは必ずこの児なり。」と言ひしが、（その通りに）げにも成長の後は、群をぬきんでたる名人となれり。

後、この与五郎国重が銘をすり落とし、（注）正宗と切るよし、与五郎聞きて、「我、今正宗となど敷きせらるること面目あるに似たれども、数百歳の後にはつひに正宗にまさらんものを。」とて、磨き落とされぬやうに銘を深く切りしとなむ。

（「寝ざめの友」から。）

（注）備中国英賀郡水田＝現在の岡山県の地名。
関孫六＝室町時代に活躍した刀鍛冶。
焼刃＝刃の表面に焼きつけられた模様。
正宗＝鎌倉時代の名工。または、名刀。

(ア) ――線1「鍛冶の道は、親の伝へ、師の教へのみ守りては上手にはなりがたきものなり。」とあるが、「八郎左衛門」がそのように考える理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 きっかけをつかみ有名な鍛冶師になった「関孫六」のように、素晴らしい刀を作れるようになるためには思案し試行を重ねることが必要だから。

2 時流に乗った刀を作ることで知られた「関孫六」のように、有名な鍛冶師になるためには流行を取り入れた刀作りを心がけることが大切だから。

3 唯一無二の刀を作った「関孫六」のように、誰もが認める素晴らしい作品を作るには身近なものから手がかりを見つけ出すことが近道だから。

4 鍛冶における常識を破ることで独特な刀を作った「関孫六」のように、鍛冶の歴史を変えるためには自由な発想で刀を作ることが重要だから。

(イ) ――線2「与五郎せせら笑ひ」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「関孫六」が評価を高めるために不正をしたのではないかと疑念を抱いていたところ、「八郎左衛門」の話を聞いて思っていた通りだとわかったから。

2 「関孫六」の鍛冶の技を一度は見てみたいと思っていたが、「八郎左衛門」の話を聞いて世間で評価されるほどには技量は高くないことがわかったから。

3 「関孫六」の作品には特徴がないと思っていたところ、「八郎左衛門」の話を聞いて参考にしたものを見えた通りに再現しただけであると気づいたから。

4 「関孫六」の作品を見たときに高い評価を得るほどのものではないと思っていたが、「八郎左衛門」の話を聞いて着眼点が良くないことに気づいたから。

(ウ) ――線3「我が家をおこすべきものは必ずこの児なり。」とあるが、「八郎左衛門」がそのように言った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 多くの鍛冶師が辞めていく中にあっても、「与五郎」が家を存続させていくことを約束してくれたことに感激し、強い意志を示してくれた「与五郎」を誇らしく感じたから。

2 修練が足りない「与五郎」を、立派な鍛冶師として育て上げなければならないと考え、受け継がれてきた技術を少しずつでも「与五郎」に引き継がせようと決意したから。

3 壮大なものを手本にして刀を作ると宣言した「与五郎」を見て、きっと偉大なことを成し遂げるに違いないと考え、「与五郎」は国重の名を高めていく人物だと思ったから。

4 普段から身近にある自然の観察を怠らない「与五郎」は勤勉だと判断し、国重の名を受け継がなくても、「与五郎」が伝統と真摯に向き合っていける人物だと確信したから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「与五郎」は、「正宗」と銘が刻まれた作者の異なる刀が沢山あることから、数百年後には自分の作品であるかわからなくなることを不安に思い、特殊な細工を施して刀に銘を刻み込んだ。

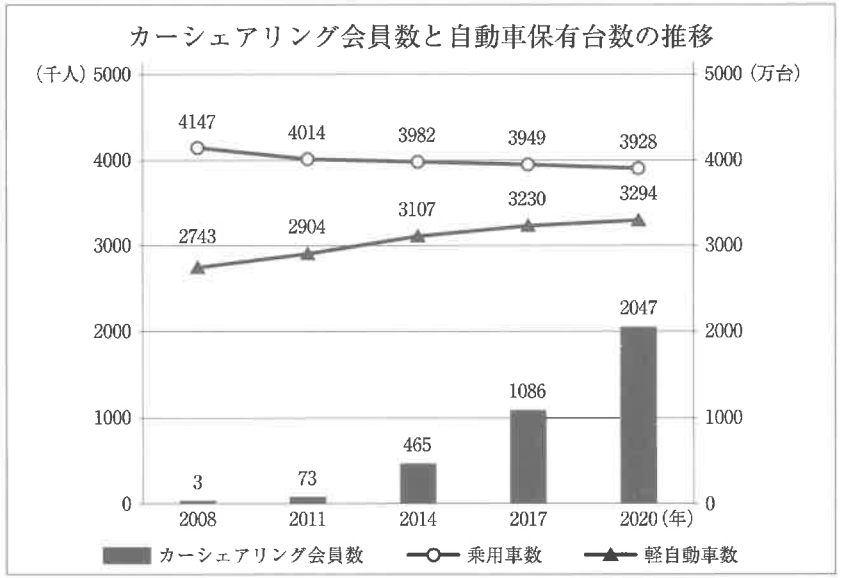
2 「与五郎」は、「正宗」と同じくらい傑出した鍛冶師として評価されていることを誇らしく思いつつも、数百年後には自分が作った刀の方が高く評価されるはずだとして、銘を刻み込んだ。

3 「与五郎」は、代々続く伝統を捨てて「正宗」と銘を変更し、時代の変化によって自分の作品が失われないようにするため、自身の銘を他の者が使うことを禁止した上で銘を刻み込んだ。

4 「与五郎」は、数百年後に自身よりすぐれた鍛冶師が現れたときに、国重が作った刀には価値がないと見なすことがないようにしようと、刀に名刀の印である「正宗」の銘を刻み込んだ。

問五　中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」で「シェアリングサービス」について調べ、発表に向けて話し合いをしている。次の**グラフ1**、**資料**、**グラフ2**と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

グラフ1



公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団「わが国のカーシェアリング車両台数と会員数の推移」国土交通省「数字で見る自動車 2021」より作成。

Aさん　私たちは、何かを共有したり貸し借りしたりするシェアリングサービスについて調べてきました。シェアリングサービスの利用状況はどうなっているのでしょうか。

Bさん　私は代表的な例として、カーシェアリングに注目し、国内における自動車の保有状況についてもあわせて調べました。ここで**グラフ1**を見てください。これは、カーシェアリングの会員数と、国に登録されている乗用車数と軽自動車数をそれぞれ示したものです。これを見ると、［　　］ことがわかります。

Cさん　そうですね。自分のものであれば自由に使用できるメリットがあるのに、カーシェアリングに代表されるシェアリングサービスがここまで広まった背景には、どのようなことがあるのでしょうか。

資料

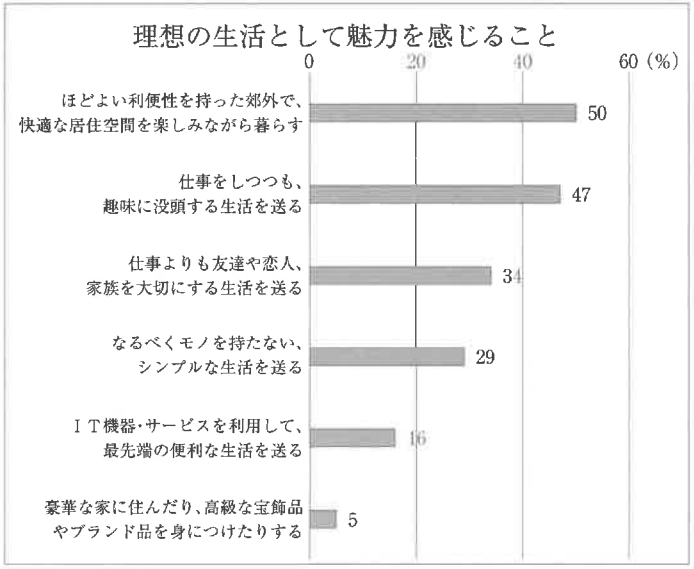
二〇世紀後半の高度成長期には、「高価なものを所有すること」が一つのステータスだった。テレビ・冷蔵庫・洗濯機が「三種の神器（じんぎ）」と呼ばれ、それらの電化製品を所有していることが、家族の幸福度を測る価値基準でもあった。その後も、自動車・マイホーム・別荘などを所有することで幸福度が満たされていることも多かった。

しかし今は、所有することだけではなかなか喜びを見出（みいだ）せない時代なのだ。むしろレンタル、シェアなどで、所有することのリスクやコストを減らしたいという人が増えている。自動車や電化製品を所有していないからといって「恥ずかしい」という感覚を持つことも、あまりないのではないだろうか。

人々の所有の概念は、今まさに様変わりしようとしている。若者世代では、それがさらに顕著だ。

（望月（もちづき）　智之（ともゆき）「二〇二五年、人は『買い物』をしなくなる」から。一部表記を改めたところがある。）

グラフ2



野村総合研究所「生活者１万人アンケート調査（2018 年）」より作成。

Dさん　そのことを考えるために、私は、ものを所有することに対する人々の考え方の変化について調べました。ここで**資料**を見てください。これを読むと、以前は高価なものを所有することが一種のステータス、つまり社会的な地位を示していたことがわかります。

Bさん　高価なものを所有することは、幸福度が高いとされていたのですね。それに対して今は、ものを所有し、管理することの手間をなくしたい人や、ものにかかる費用を減らしたいと考える人が増えており、高価なものを所有することだけに価値を見出せない時代であると書かれています。ものを所有すること自体がリスクであったりコストがかかったりすることだと捉える人が多いということですね。

Aさん　まさに、人々の所有に対する考え方が様変わりしたのですね。高価なものに魅力を感じない人が増えた今、人々はどのようなことに幸福を感じるようになったのでしょうか。

Cさん　私は、人々が生活において重視していることについて調べました。ここで、理想の暮らしに関するアンケート調査の結果をもとに作成した、**グラフ2**を見てください。やはり、高価なものを所有することに魅力を感じる人の割合が低いことがわかります。

Dさん　これを見ると、快適な生活や趣味などを大切にしている人の割合が高いことがわかりますね。また、快適な生活や趣味以外に、人間関係を重視することやシンプルな生活に魅力を感じる人の割合も三割程度あります。このことから考えると、生活において重視したり魅力を感じたりすることは人によって様々だと言えそうです。

Bさん　なるほど。今は、暮らしの中で大切にしていることが多様化してきているのですね。

Aさん　それでは、話し合いの内容をまとめましょう。**資料**と**グラフ2**から考えると、シェアリングサービスの広まりには、人々の幸福に対する考え方が［　　］ことが背景にあると考えられます。

Dさん　シェアリングサービスには、カーシェアリングの他にどのようなサービスがあるのかも調べたいですね。

Cさん　そうですね。また、シェアリングサービスが広まったことによって生じている問題や課題なども調べた上で、発表ができればいいと思います。

(ア)　本文中の［　　］に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　二〇一四年は、二〇一七年と比べて、カーシェアリング会員数が三分の一以下である
2　二〇一七年は、二〇一一年と比べて、軽自動車数が約二倍になっている
3　二〇二〇年は、二〇〇八年と比べて、カーシェアリング会員数が二百万人以上増えている
4　二〇二〇年は、二〇一一年と比べて、乗用車数と軽自動車数がともに減っている

(イ)　本文中の［　　］に適する「Aさん」のことばを、次の①～④の条件を満たして書きなさい。

① 書き出しの［シェアリングサービスの広まりには、人々の幸福に対する考え方が］という語句に続けて書き、文末の［ことが背景にあると考えられます。］という語句につながる**一文**となるように書くこと。
② 書き出しと文末の語句の間の文字数が**三十字以上四十字以内**となるように書くこと。
③ **資料**と**グラフ2**から読み取った具体的な内容に触れていること。
④ 「所有」という語句を、そのまま用いること。

（問題は、これで終わりです。）